

彙報

平成一五年度春期東洋学講座講演要旨

(中国地方志・族譜の伝統)

第四七三回 五月二三日(火)

地方志の編纂と地域社会

慶應義塾大学教授 山本英史

I 地方志とはどんなものか

地方志とは、地方行政単位を範囲に、その地理・歴史を総合的に記録した書籍である。それは史書であるとともに歴史的沿革に基づく地誌であり、地方の現状報告を兼ねている。

地方志は明代後半から清代にかけて盛んに編纂された。

その種類には行政単位に応じた一統志、通志、府・州・県志等の別があった。他に官府の主導によらない市鎮レベルの郷鎮志や個人の著作である私撰志などもあった。また、清代の県志が七〇%を占めた。

彙報 山本

編纂は多くの場合、官府が主宰し、地方官は地元の学者や文人を招聘して編纂に当たらせ、生員(県学等の学校に入学が認められた学生)たちにはさらに資料を収集させた。経費は公費では負担されず、地方官や地元有力者による資金で賄ったため、同じ地方志であっても経済的および文化的なレベルの差違によってその内容や改訂編纂回数に大きな違いが見られた。ただし、全体の構成にはある種の定型化・画一化が見られ、それは大別①沿革、②行政に関する情報、③人に関する記録の三系統に分かれる。この体裁は明代以前の地方志の伝統から受け継がれたものである。

編纂の目的の中心は地元の有力者たちの要求であったことから、地方志の編纂には、その中にいかに地域とそこに住む人物を盛り込むかという問題が重要になった。例えば乾隆『無錫県志』には、「建置沿革」でその土地の沿革を殷周時代から説き起こし、「選舉表」でその地域の科挙合格者を列挙し、「官蹟」、「儒林」、「文苑」、等の項で目立った人物の事績を記録する。これは地方志が地域とその人々を描く典型を示している。

現存する地方志は約八二〇種あるといわれている。日本では東洋文庫をはじめとして国立国会図書館、内閣文庫、京都大学人文科学研究所図書館、東京大学東洋文化研究所図書館などが比較的多くの地方志を収蔵している。なかで

第八十五卷 二八九

も東洋文庫には約四〇〇〇種があり、その蔵書数は中国以外の海外の図書館ではアメリカ議会図書館に次ぐ世界第二位を誇っている。

II 地方志に描かれた地域社会

ところで、地方志の記事の中には編者の見識、教養、体験などによって他と比べて特異な視点から地域を描いたものが少なからず見られ、それらは後世の歴史研究者から貴重な史料として注目されてきた。ただ、このような記事は断片的、かつ地方志全体の情報の総量中においては相対的に稀少であった点を留意しなければならない。また、さらに根本的なこととして、官撰の地方志には地域を描く史料としてはなお若干の問題があったことである。無錫県の一書員が編纂した私撰の地方志である『錫金識小録』はその点を如実に語っている。県志を中心とする官撰の地方志とは「簡嚴莊雅なもの」、「民衆生活の利害に触れにくいもの」、「善を揚げ、悪を隠すもの」という。すなわち地方志編纂の本質は外に対しては自らの居住空間がいかに由緒正しく、豊かな伝統を有し、文化的・道徳的に優れた地域であるかを、また自らの祖先がいかに立派であり、ひいてはその血を引く自己とその一族が抜きん出たものであることを官のお墨付きを得てその地域に公に喧伝することにあつた。

『錫金識小録』はこうした地方志の限界を克服し、これまでの地方志には見られないもうひとつの側面、すなわち「醜惡」の世界をあえて描こうとした。

III 地方志に描かれぬ地域社会

『錫金識小録』には本来の地方志には描かれぬ世界、すなわち実際の地域社会と思われるものがそこに示されている。それゆえにこれは得がたい情報として注目されてきた。だが、『錫金識小録』もまた記録としては若干の問題を持っていた。それはまた極めて異端の地方志であり、その記載に恣意的・偏向的な面がなかつたとはいえない。出世の機会がなかつた著者の在地社会やその有力者に対して向けられた思いにはいくらかの屈折があり、それが彼の人物描写に微妙な影響を与えたかもしれない。また、批判的な士人の目には当時の郷紳が明代に比べて実際以上に懦弱に映つたのかもしれない。

個人の著作は個性的とはいえ、そこには偏見と不公正が必ず伴う。それゆえ、「描かれぬ地域」がこのように異端の地方志に見られるからといって、それが地域の実態をありのままに伝えているとは必ずしも断言できないのである。

IV 新編地方志の編纂事業と地域社会

一九九〇年代から中国各地で陸続として刊行されるようになった新編地方志は、近代歴史学や社会科学の手法による考証と分析を経て、改めて我々に地域の情報を詳細かつ具体的に伝えてくれている。だが、新編地方志もまた地方志である限り、伝統的な地方志が有した問題、すなわち「地域の事情に妨げられて地域の実情をありのままに伝えない」という問題を克服しているとはいえない。新編地方志を利用する際の留意点もそこにある。

V 結語

地方志は特に明清時代や近代の社会経済史研究に貴重な情報を提供してきたし、これからもそうあり続けると思われる。だが、地方志を史料としてさらに活用するためには、その史料批判をもっと厳密に行わなければならない。地方志に記された記事は一見客観的なものであると思われがちであるが、その記事に込められた思惑は多様であり、その背景を読み解かなければ簡単に使えないというのが実情である。このことは中国の史料全体にいえることであるが、とりわけ地域の利害にストレートに結びつく地方志にはそれが顕著であるといえよう。

第四七四回 五月二〇日（火）

珠江デルタから考える中国の地域史

大阪大学教授 片山 剛

第一部 位牌祭祀空間の地域的構造

漢族の各地域社会における文化は、「漢族としての共通性」をもちながらも、それぞれ固有の特色をもつと考えられる。たとえば位牌祭祀についていうならば、「家庭の祭壇で行われる祖先祭祀」は、漢族伝統社会における最も基本的な位牌祭祀である。だが家庭の祭壇でいかなる死者が祭祀されるのかについては、必ずしも地域間で同一であるとは限らない。そして、家庭の祭壇を始めとする位牌祭祀諸空間の配置・役割も地域間で異なる可能性がある。

第一部では、二〇世紀前半と改革開放後の一九八〇年代以降とを中心に、珠江デルタ農村における位牌祭祀諸空間の構造を、族譜や実地の探訪・観察に基づいて考察する。第一に、家庭の祭壇において、いかなる死者が祭祀されるのか、換言すれば、いかなる死者が家庭の祭壇での祭祀から排除されるのかを明らかにする。第二に、家庭の祭壇か

ら排除された死者の位牌は、いかなる空間に置かれて祭祀されるのかを検討する。そして、当該地域における位牌祭祀諸空間の配置・役割の大まかな見取り図を提示する。第三に、江南デルタ農村等と対比しつつ、珠江デルタ農村における位牌祭祀の特質を浮き彫りにする。

その結果、珠江デルタ農村について、(1)位牌祭祀諸空間は、大まかには、家庭の祭壇、屋内の非家庭空間、屋外空間の三層構造となつてゐること、(2)新知見として、一九四九年以前には祠堂における「耐食」が実在していたこと、また家庭の祭壇から排除された位牌を専門に安置する「百姓公婆祠」等の施設が一九八〇年代以降復活していること、(3)家庭の祭壇と宗族の祠堂における祭祀のあり方は、二〇世紀前半の江南デルタ農村のそれと比べて、儒教や明清王朝の理念にかなり忠実であること、等を指摘した。

第二部 地域社会の歴史的特質

発表者はこれまで地方志・族譜、さらに実地調査等を利用した珠江デルタ農村社会史研究として、デルタ開発史、地縁社会の重層性、里甲制Ⅱ図甲制の構造と存続、図甲制のハイアラキーの社会構造、当該地域の主要な民系である「広東人」の移住伝説、等を考察してきた。その結果、珠江デルタ農村社会の特質は、里甲制の存続に典型的に見

られるように、明朝に始まる諸制度と密接な関連をもつことに気づき、その理由を、掘り下げて説明する必要性を痛感するに至つた。そして、第一部であげた(3)の指摘を含めて、この課題の検討を第二部で試みた。

具体的には、①広東人の移住時期とその時の先住者、②低地デルタの開発主体、③広東人の移住伝説、族譜の得時期、以上の三点について、広東人の移住伝説、族譜の記載、二〇世紀初の郷土志（地方志とは編纂方針が異なる）、これら三種の資料に表れる言説を比較対照した。その結果、先住者と異なり、広東人は低地デルタ開発技術を有する、広東人が中華王朝から戸籍を獲得するのは明初である、先住者は明朝によつて駆逐されていく等の言説から、先住者に代わつて、広東人が地域社会形成の主役として登場したのは明代であつた、そのため、広東人は明朝との関係を強めるべく、明朝が正統とする儒教文化（朱子学）や里甲制などの制度を積極的に摂取していった、と推測した。そして、このことが現在に至るまで、広東人珠江デルタ社会における歴史的刻印となつてゐるのではないか、との仮説を提示した。

第四七五回 五月二七日(火)

中国近世譜と宗族の実像

大阪市立大学教授 井上 徹

宋代以降に編纂された族譜を近世譜という。その主な特徴は、周代の古宗法を理想として父系血統の系譜を記録し、共同祖先嫡系の子孫(宗子)の統率のもとで親族を集合すること(宗族形成)を指す点にある。近世譜のモデルは

蘇洵の譜(蘇譜)と歐陽脩の譜(歐陽譜)にあるとされ、それぞれ小宗譜、大宗譜として類別される。両譜を模範とする族譜は一六世紀以降の明清時代に普及し、持続的な編纂がなされるようになった。日本では、東洋文庫、国会図書館、東大東洋文化研究所などに族譜が収蔵されているが、このうち最も多くの族譜を蒐集しているのが東洋文庫であり、その収蔵数は八〇〇部を越える。本文庫収蔵の族譜は、地域別にみると、江南(浙江・江蘇)のものが圧倒的に多いが、他機関に較べて華北の族譜を比較的多く蒐集しているのも特徴の一つである。また、これらの族譜のなかには歴史資料として価値の高いものが少なくなく、蒐集者の優れた見識を感じさせる。

本講演では広東の族譜に注目する。日本に現存する広東

の族譜は江南のものほど多くはないが、広東に普及した宗族の規模や密度は江南をはるかに凌駕することで知られており、中国近世の宗族を論じるうえで重要な位置を占めている。広東なかでも珠江デルタを対象として、族譜及びその他の史料(文集、地方志、判牘)を用いながら、広東の族譜がどのように編纂されたのか、また族譜を編纂した宗族の実像はどのようなものであったのかを紹介したい。

珠江デルタでは、明代半ば以降、急速に発展した土地開発と商業化・都市化のプロセスにおいて台頭した商業資本、地主などが相繼いで科挙官僚制に参入し、官僚身分を獲得した士大夫(郷紳)は広東社会に絶大な影響力を及ぼした。こうした士大夫の台頭は、辺境の地とみなされた広東が科挙官僚制を軸とする儒教文化の圏域に組み込まれつつあったことを示す。それを象徴するのは提学副使・魏校の淫祠破壊令である。魏校は広州城を初めとして都市・農村の淫祠を破壊し、社学を設立したが、民間信仰を根絶するには、民間の神々に代えて祖先神を信仰させる必要があると認識していた。科挙官僚制に組み込まれ、儒教文化の潮流が押し寄せるなかで、魏校の政策を継承した広東の士大夫の間に宗祠を設立して祖先祭祀を実践するという動きが登場した。

宗祠設立と祖先祭祀の挙行に際して、まず必要とされる

のは祖先の系譜の再現である。広州の多くの族譜は、祖先が中原から広東北部の珠璣巷に移住し、更に珠江デルタへと南遷したという珠璣巷伝説を採用したが、最も早くにこの伝説を記録したのは、郷紳の霍韜（広州府南海県深村堡石頭の人）である。霍韜は石頭霍氏の系譜を初めて再現した時、珠璣巷伝説とともに、秦の嶺南攻略の時、中原から南下したという秦移住説を紹介した。ところが、彼の子孫が族譜を編むに際しては、後者の説を捨てて珠璣巷伝説を採用した。その背景にあるのは民族問題である。明代後半の広東ではヤオ族などの少数民族が漢族と錯居し、しかも漢族との対立は深刻なものになっていた。そうした情況のもとで、秦代以来の土着の家系であることを認めれば、原住民の少数民族の系譜とみなされる可能性が生じる。そこで、士大夫の家系へと上昇した霍氏は、珠璣巷伝説を選び取り、自己の系譜が漢族出自たることを証明しようとしたと考えられる。

霍韜は珠璣巷伝説、秦移住説ともに確たる根拠はないとしつつも、いずれにせよ中原に出自する漢族の家系であることをアピールしたうえで、宗法システムの構築に取りかかった。元末の始祖（石龍公）以来の祖先の事跡を記録し、彼らを祭る大宗祠を創始して、宗族集団を形成したのである。その後、霍氏は清代までの間に、石頭から、西は隣接

する張槎堡、及び西樵山へ、また東は広州城へと進出し、移住地において次々と祠堂を設立していった。石頭霍氏の祠堂建設の歩みは、珠江デルタにおける宗祠建設の潮流とほぼ重なる。広州城と仏山鎮は珠江デルタにおける商業化・都市化を牽引する両輪であり、この両都市に最も宗祠が集中したが、周辺の農村にも宗祠が多数設立されていった。広東では、宗子が祠堂における祖先祭祀を主宰し、族長が族内の秩序を保つ役割を担い、祭祀を維持するための祭田も充実にしていた。一七世紀までに、宗子と族長を指導者とする宗法システムが広東の宗族の標準型として定着したのである。

霍韜とほぼ同じ時代を生きた広州の郷紳・黄佐は「大学」の理念——修身・齐家・治国・平天下——に依拠し、人々が祖先と宗族（家）を大事にすれば、家の集積である社会にも自ずと儒教秩序が醸成されると考えた。しかし、宗族普及の過程で明らかになったのは、宗族形成が進めば、宗族相互の争い（械闘）が避けられないという現実であった。